

札幌青少年科学館のリニューアルされたプラネタリウム



9月28日(土)、晴天に恵まれ「札幌支部教研2019」が行われました。今年も例年とスタイルを変え、外に飛び出し、札幌に存在する文化的科学的遺産を体験しようと、巡検型の教研を試みました。名づけて「動く支部教研」です。

まず、新札幌の青少年科学館に集合し、館内見学の後プラネタリウムを観賞。私は何十年かぶりのプラネタリウムでしたが、最新のものはすこい。参加した全員が「これはイイ!」と大絶賛でした。宇宙のダイナミックさが見事に描かれていま

是非来年はぐい一緒に!

好評!動く支部教研 2019



た。

夕食後、貸切バスで白石のノーム・ヒバクシャ会館へ。この建物は全国的にも珍しい原爆に関する民間の常設ミュージアムです。ここでも自由見学の後、広島で12歳の時に被爆された松本さんのお話を聞きました。被爆くの時のお話も生々しかったのですが、その後人生も赤裸々に語られ、原爆の影響の大きさを知ることができました。松本さんのお話の後に、この8月、原水禁世界大会で私たちの代表として長崎に行った手稲養護学校の細谷拓樹先生の報告(下面に掲載)を聞き、平和の大切さを皆で共有しました。

最後はサッポロビール園で交流会。参加者はのべ37人(小・中・高生を含む)の充実した1日であったと思います。札幌にはまだまだ見応えのある施設がたくさんあります。来年も「動く」教研を続けたい。ぜひ多くの方の参加で、対話的で主体的な深い学びをつくりあげませんか?

丸山 稔 丘珠高校



世界大会の報告を行う細谷さん



被爆体験に聞き入る参加者たち



被爆体験を語る松本郁子さん

原爆資料館でぐい一緒に!

原爆資料館で人がどのような死んでいったか、残された人々の苦しみを目にしたとき、夜遅くでしたが胸の苦しさを、どうしても平和祈念公園に行かなければならない気がしました。

戦争から時がたち、戦争の記憶が薄れていき、戦争を経験しない世代が増えると、平和という価値の重みを感じられなくなったり、信じることができなくなってしまう。文部省の教科書『あたらしい憲法のはなし』には、日本が一切の軍備を持たないことに対して、「しかしみなさんは、けつして心ぼそく思うことはありません。(中略)世の中に、正しいことくらい強いものはありません。」と力強く述べています。原爆のことを学ぶと、当時の人々が表面上の言葉だけでこう書いたとは思えません。当時の大人たちが子供たちに真剣に教えようとしたことは何かを考えたとき、私たち教員は生の声を聴きながら、平和とは何かを考え続ける他はないのではないのでしょうか。

線香の香りがムンムンと漂い、その横でカトリックの方々が儀式をしています。そこに行くとなぜか心が落ち着くような前を向いていけるような不思議な感覚に陥りました。人々が行き着くところは最終的に宗教なのだと感じました。人々が祈りを捧げる背景には70年から続く悲しみがあって、そこから導き出した平和という普遍的な価値があることは言うまでもありません。だからこそ、仏教とキリスト教が違和感なく共存できる異質な空間が生まれるのでしょう。さて、カトリックの儀式の中で、高校生が、戦時中は浦上の鐘をならすことができなかったが、戦争が終わったことで再び鐘を鳴らすことができるようになったと述べていました。戦争の傷から立ち直ろうとする心の営みが許されるのは、戦争が

最後に、原水禁大会に参加するにあたり、たくさんの方の励みや支援をいただいたこと、感謝申し上げます。ありがとうございました。細谷拓樹 手稲養護

森友学園より不思議!?

高校配置地域別検討協議会でも説明なし
高校配置計画・特別支援配置計画にも盛り込まれない
教育委員会での報告記録もない

白陵高校に札幌養護学校高等部を併設する補正予算が可決!

手稲養護学校高等部

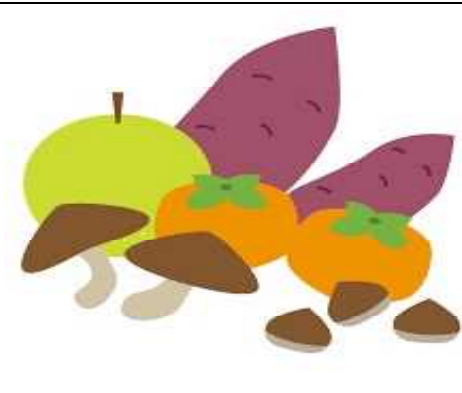
両校の併設の動きは、道教委が秘密裏に調整作業を続けたため、9月5日付け北海道通信に「学校の教室不足解消 3定道議会教育費補正予算案」との見出しで初めて報道されるまで、公にされてきませんでした。高校配置に関する地域別検討協議会でも一切説明なし、高校配置計画・特別支援配置計画にも一言も触れられていない、教育委員会が協議・報告された記録もありません。一体いつ誰が決めたかすら不明なのです。決定までの手続きの適正さに大きな問題があります。保護者への説明が後回しにされた結果、10月4日に予算が道議会でも可決されても札幌養護学校では、保護者からの不満や疑問が噴出し、対応におわれています。矢面に立たされているのは、道教委の責任者ではなく両校の教職員です。自らの配置計画の見通しの甘さを棚上げして、結論ありきで計画を進めようとする道教委の強引な姿勢により、最も大切にされなければならぬ両校の生徒・保護者らの当事者性がないがしろにされていることは重大な問題です。

教育条件もいなくなる

また、今回の計画では、札幌養護学校高等部・白陵高校どちらにも教育条件の切り下げを強いることとなります。そもそも特別支援学校の過密狭域化解消は、新設校の建設をせずに既存施設を活用することで解決することができるといえるのでしょうか。今回の案では、同じフロアに異なる学年が混在することや白陵生との接触を断つために閉鎖的な環境をつくらざるを得ないなど、既存施設活用、とりわけ在校生のいる高校への併設には最初から懸念や問題が付きまとい、十分な教育条件確保には限界があります。生徒の発達保障を最優先に考えれば、新設校設置を基本方針に据えるなど、抜本的な方針転換が必要と見えます。

狭域化解決に向けた道民的議論が必要

高等部移転により一時的に札幌養護学校小中中学部の狭域化が緩和することがあっても、特別支援学校への希望者の増加を考えると抜本的な解決になっていません。特別支援学校の設置基準の策定を求めつつも、それを待つことなく、札幌市内に札幌養護や伏見支援のような学校を増設しなければ、抜本的な解決になりません。政令指定都市札幌市の学校設置負担も議論の湖上に乗せる必要があります。道教委は早急に札幌市としっかりと連携をとりあい道民的な課題として議論をすすめるなければなりません。



1980年台の後半、札幌石狩圏の高校は「すし詰め・マンモス化」と形容されるに陥り、47人定員・1学年12学級を押し付けられつつも、新設高校が誕生しました。高校新設の背景には新増設を求める道民運動がありました。現在の特別支援学校を取り巻く問題を解決していくためにも、道民の世論と運動が決定的に重要です。養護学校義務化40年となります。しかし、特別支援学校設置を水面下ですすめているようではノーマライゼーションのインクルーシブの理想は絵空事に過ぎません。道民的な議論が決定的に重要です。それを進める決意と覚悟をわしたち自身が持つことなしに、子どもたちの教育条件を第一に考えることを道教委に求めることはできないのではないのでしょうか。